

変わりゆく図書館 －新図書館プロジェクト活動報告－

中央図書館事務部 収書・整理課 出田善明

近年のSNSの発達などで社会が国際化へ加速度的に変貌し、学生や教員の図書館に対する要望や姿勢は急激に変化しております。また、平成24年12月に世耕弘成理事長（当時）から、「キャンパス建て替え構想」が提案され、図書館を中心として本館を建て替え、東大阪キャンパスを5年間で整備する計画が発表されたことで、新館建設がいよいよ現実のものとなりました。この現状を踏まえ、現在中央図書館が取り組んでいる“これからの図書館について考え、提案する”活動について報告します。

平成25年4月、中央図書館館長、中央図書館事務部の事務部長、各課課長、課員の総勢10名で構成されました“新図書館プロジェクトワーキンググループ”（以下、新館プロジェクト）が発足しました。同年4月8日には第1回の会議が開催され、3月現在で16回を数えています。会議内容については館員全員で共有し、意見を募ることで中央図書館の意見としてのブラッシュアップを図っております。

まず新館プロジェクトでは、カビによる資料の汚損など、現在問題となっている事項をどう解決するか、また将来に向けてどう対策するかを検討しました。さらに他大学の現状を把握し、本学に補うべきものを見出し、全く新しいアイデアを提案するという方針から、関西は同志社大学ラーニングコモンズを含め3大学、関東は立教大学池袋図書館など6大学の図書館・ラーニングコモンズを視察しました。

視察を行った結果、ハード面では3つの設備が目立ちました。

1つ目は“ラーニングコモンズ”です。複数

の学生や教員がゼミや学部などの垣根を越えて議論を交わすことで新しい発見や理解を深める。そこに電子や印刷物を問わず各自で集めた情報や知識を表現する設備が用意されているという学習スタイルの「場」です。

2つ目は“ライティングサポートセンター”です。これは大学生にとって必須となるレポートや論文等の作成力を養うために設置された「場」で、その運用は教員や大学院生が行っています。

3つ目は学生が図書館に訪れたいくなる癒しの「場」です。リクライニング式の椅子と小さなテーブルを配し“心を落ち着ける場所”として提供している大学が目立ちました。また、採光用の窓を大きくしたり、断熱効果の高い壁にしたりすることでエネルギー効率を良くした結果、経費を大きく削減できたという報告もありました。

ソフト面では、学生の課題や授業のなかで、図書館の図書の利用を必須としたり、教員が図書館の重要性を解説したりするなど、教員との連携を高めることで、学生の学習意欲を高める方法が取られていたことが特徴的でした。

これらを踏まえ中央図書館では、ハード面においては、必要な資料を周囲に配置し、学生・教員の交流を主とする“アクティブゾーン”と、専門書を配置し、学生・教員がそれぞれの学習や研究に集中して打ち込むことができる“サイレントゾーン”を想定したゾーンが必要であると考えられます。また、増え続ける蔵書に対していずれ訪れる収蔵能力の限界を想定し、電子資料への切り替えを検討したり、視聴覚資料の視聴スペースや利

用相談カウンターなど、図書館に欠かせない設備を具体的に挙げて、必要な閲覧席数を確保しつつ、利用しやすい配置を検討しています。さらにソフト面においては、研究発表や実験を閉鎖的な空間ではなく、新館の中心で誰もが見ることのできる形で行えるようにするなど、教員や学生、学部などの垣根を越えた交流ができる方法を模索しています。

最後に中央図書館では、利用者同士が交流し、互いに切磋琢磨で培われる学習意欲向上の一助となること、また、研究者が静かな環境で研究に没頭することで、その質を高められる環境を提供すること、この2つの目標をもって積極的に発言し、「この図書館で勉強するために近畿大学に入学したい」と思われる、他には真似のできない魅力的な図書館を目指して今後も活動していきます。